研究

安政の大獄で佐伯藩預かりとなった
水戸藩士 鮎沢伊太夫と佐伯藩（四）

菅野隆光
（会員 佐伯市中山）

一・緊迫する東海道

伊太夫の江戸への旅も終わりが近い。文久三（1863）年二月三日は平塚宿を朝早く立ち川崎宿迄。川崎を出て多摩川を渡れば現在の東京都大田区、江戸は目前である。

平塚を出て程なく雪を頂いた富士山を望む。天気は「大霜晝後天気暖和」とある。前夜の放射冷却で見事に晴れ、暖日。ここまでの駿河湾沿いでは雨が続き、体調を崩した者も多かった。一転晴れ渡った空をバックに日の出を迎える。日が昇るにつれ刻々と変化する雪の富士は穀治も即詠した如く、どんなに美しかったことであろうか。

一方江戸に近づくにつれ東海道はものものしい状況になっていた。直接的には前年八月に起こった生麦事件の影響が大きい。伊太夫も『再来記行』には

・・金川（神奈川）ハ宿内所々ニ番所出来、三布白の幕を張、ゲベル貳挺棒抔飾り、守衛之士貳三人ツヽ居、全く異人往来之騒きを静候ならん、右様ノ番所生麦邊迄凡十四五ヶ所モアリ・・　（再p.639）

と、その緊張感漂う厳戒の様子を記している。伊太夫が御預けとなっている間に世の中がどのように動いたかを、ここで見ておきたい。

嘉永六（1853）年のペリー来航以来、太平の世も終わりを告げ、開国、条約締結と大きな変化の時にさしかかった。伊太夫もこの波に巻き込まれ、佐伯藩お預けとなった。伊太夫が伝馬町の獄に繋がれたのは、横浜開港の年、安政六（1859）年のことであった。佐伯藩禁錮となったのは万延元（1860）年一月。この年は三月三日、桜田門外の変、同二十三日、それに関係した兄が大坂で自刃。八月には主君徳川斉昭も亡くなっている。明けて文久元（1861）年高輪東禅寺の英公使館襲撃事件。そして文久二年八月には生麦事件がおこっている。

伊太夫が佐伯を出発したのはその年の十二月、そして翌年文久三（1863）年二月三日、生麦事件の現場である金川を通りかかったのである。海の方を見れば横浜が遠望

できる。伊太夫の感慨

・・横濱ヲ遙ニ見ルニ家數夥敷異船ト覺シキ三段帆之船十三貳艘遠近ニ懸リ、其ノ外日本船碁布セリ、僅五六年ノ内ニ世ノ變化セシ事、嘆ルニ餘アリ・・　（再 p.639）

伊太夫が佐伯に護送されていった安政六年、横浜開港時の戸数百一戸、人口は四百八十二人[1]、横浜は金川の対岸の沼地にある一漁村であった。それがこの変わりようである、変化の急なるを、嘆ずるのも無理からぬ事である。

四日深夜九つ半（午前一時）江戸藩邸に護送隊の責任者長溝からの御用状が届いた。

先月十九日伏見表江罷登、翌廿日ゟ東海道佐屋路致旅行候處、御上洛前諸家様方御上京ニ付、場所ニ寄人馬継立差支、日程定日ゟ一日後連今三日同駅江無別条致止宿候間、今日四日可致着府

佐伯藩「文久三年御用日記」

（史料№559－(3) pp.157－158）

先月十九日大坂蔵屋敷前から船で淀川を遡り伏見迄行き、翌二十日より東海道にかかり、予定より一日遅れたが、今日四日には到着の予定、という知らせである。予定が遅れた理由について「諸家様方御上京ニ付」、上京する諸大名方が多いので、人足、馬などの手配が難しいということをあげている。この時期なぜ諸大名が上京していたのであろうか。

『再来記行』にも行き逢った行列を記録している。それを表にまとめてみた。

『再来記行』に見える大名の往来【文久三年】

月日	大名	場所	行列の目的・様子	P
一月八日	肥前家老鍋島	宮市	帰国、勅諚奉載	606
一月十六日	兵庫因州侯	須磨	天杯・勅書と札を立てた長持を警固	621
一月廿四日	島原侯	万馬	帰国	631
一月廿四日	秋田侯	万馬	上京	631
一月廿七日	藝州侯	大井川	帰国	634
一月廿八日	米澤侯	宇津峠	上京 古風實用可賞	635
一月廿八日	江尻雲州侯	吉田	吉田泊	635
二月一日	松平豊州	箱根	毛利家本陣に泊	637
二月二日	黒田侯	箱根		637
二月二日	篠山城主青山	箱根		638
二月二日	阿波侯	大磯	大磯泊	638
二月三日	高田侯	戸塚	人数多し、三千人近くと見請る	639

伊太夫は、行き逢った行列のいくつかには短評を添えているが、一番評価が高いのは米沢侯、上杉斉憲の行列。

ゲベル銃の鉄砲隊を揃え、必要な道具は具足箱ではなく、風呂敷、或いは筵に包んで国から従ってきた人夫に持たせている。「古風実用、賞すべし」と評している。大規模であったのは戸塚で行き逢った高田侯、

人数多シ和夷製鉄砲五六百挺もあらん、駕籠ハ稀ニテ馬を為引候士数多也、武器長持等数不知、一同綿服立付・・・惣勢三千近くと見請る、　（再 p.639）

と記している。大名の往来の慌ただしかった文久二年当初の東海道であるが、家茂の上洛（文久三年三月）を控え、各大名がこぞって上洛していたことがある。それだけではない。幕府の権威の衰えを象徴するような二つの出来事も混雑の一因となっていたのである。その一つが文久二年十月十四日、幕府の頭越しに薩長など十四藩に下された内勅である。

・・一四藩に勅使を派遣して勅使を派遣して幕府に攘夷を国家の基本方針と定めるように督促したから、諸藩もそのように心得て国家のために尽力することを求める、とする天皇の言葉が伝えられた。・・・幕府にはばかることなく公然となされた事実上の天皇の命令だった。天皇の命令があったことは、一四藩の他にも伝わり、翌一八六三（文久三）年の正月過ぎから、次々と諸大名の上京が続いた。もちろん幕府の許可など得ていない。・・

『幕末史』佐々木克　ちくま新書（pp.90－91）

『再来記行』にも「肥前家老鍋島河内京師より勅諚奉戴シ・・」あるいは伊太夫が拝謁した因州侯の行列も「天杯ト長持様ノ物、次ニ勅書ト書タル札ヲ立タル長持」という記述が見られ、諸大名が内勅に応じ上京していることが伺われる。

もう一つは文久の改革[2]で参勤交代の制度が緩和され、大名の一年在国、一年在府（江戸）が三年に一度とし、妻子の帰国を許したことである。

『再来記行』にも次のような往来が記録されている。

妻子の往来【文久三年】

月日	大名	場所	行列の目的・様子	P
一月　三日	薩州侯娘	吉　田	長持等百棹荷駄同断	605
一月　三日	大村丹後守奥	吉　田	大村丹後守奥帰国の由にて止宿	605
一月　八日	津和野侯奥	広　島	津和野侯ノ奥方帰邑に逢ふ	610
一月十三日	池田侯并母公	大内村	池田丹波守并母公之休札あり	615
一月十三日	木下内匠助奥	三　石	木下内匠助奥方に逢う	616
一月十六日	肥後侯奥方	大井川	御道具美麗、侍女駕籠百有余	621
一月十九日	肥後侯姫方	淀　川	姫方帰国の下り船数十艘行き会う	624
一月廿二日	膳所侯奥方	鈴鹿山	膳所侯奥方下りに会う	630
一月廿三日	浜田の奥向	浜　名	浜田の奥向帰国の行列に逢う	630
一月廿八日	秋月侯奥方	興　津	秋月侯奥方泊	635

桜田門外の変、さらには文久二年四月、勅使に随行した薩摩藩国父島津久光の参府によって幕府の権威は大きく失墜する。幕府から見れば、藩主の父に過ぎぬ無位無官の久光の圧力によっていわば文久の改革をせざるを得なかったのである。参勤交代の形骸化は幕藩体制の緩みをもたらした。元治元（1864）年、参勤交代を再び旧に復する幕令が出されたが、これには従わなかった藩と従った藩とがあり、幕府の権威はいっそう失墜する事となった。

さらに十四藩への内勅である。天皇が大名へ直接命令するような事態はそれまでの幕藩体制の下では考えられぬことであった。現に水戸藩に下された「戊午の密勅」では藩主以下過酷な処分が幕府から下されている。伊太夫もこれにより佐伯藩預け、となったのである。しかし内勅と、それに応じた諸大名の反応は幕府の力のいっそうの衰えをはっきりと示すできごとであった。

長持百棹・荷駄百頭の荷物を連ねた薩摩の姫も、侍女の駕籠百余を従えた肥後の奥方も、この後、激動の世をむかえ、五年後にはすっかり世代わり御一新の明治の世になろうとは思いもしなかったであろう。

二月四日江戸着以降の様子を『再来記行』、『御用日記』の記述をつきあわせながら記す。

二．無事江戸着

二月四日朝川崎宿を五ッ時（8時）発。鮫洲で昼休み。藩の使が事前に到着しており、江戸に入るので旅装を改めるように羽織袴を準備していた。服装を調え出発。品川で小休止の後八ッ半（15時）過ぎ毛利藩邸着。表門潜戸より内玄関を通って着座。座敷でお祝いの挨拶を受ける。その後御用人関谷藤蔵から殿様からお祝いとして賜る大小が渡され、祝いの膳が用意されていた。

明くる朝五日、江戸へ同道した長溝等も附添い、駕籠で北町奉行所へ向かう。玄関から使者の間に通り待機。水戸藩からは従弟堀口友之進・石川清之允[3]の両名。

奉行浅野備前守より遠嶋赦免の申し渡しがあり、伊太夫は晴れて水戸藩士の身分を回復したわけである。この後の様子について両方の記述を見てみよう。まず『再来記行』では、

薄暮毛利家ノ同心等付添、小石川堀口ノ第宅へ着、折シモ君上ノ御供ニテ御國ヨリ近親知己ノ者不圖モ登リ居、一時ニ對面實ニ如夢・・　（再 p.640）

小石川藩邸に着いたところ、丁度親類知人が殿様のお供で来ており、一時に会うことができたのである。生きて再び逢えるとは思わなかった人たちに一度に会えて「夢の如し」という言葉そのままであったであろう。

一方『御用日記』では

一夜六時、差添人長溝保太夫町御奉行所ゟ引取、伊太夫儀身寄之者江御引渡

文久三年『御用日記』（史料№559-4 p.164）

奉行所から引上げ、伊太夫を身寄りの者へ引き渡した、と淡々たる記述である。

四日後の九日、水戸藩より佐伯藩邸へ、お礼の使者が訪れる。「家来鮎沢伊太夫儀、此方様江御預ヶ中長々厚御扱ニ相成、忝思召候、依之為御挨拶左之御蔵板本一部、且御肴料金五百疋被遣候」

（前掲日記 p.165）

との口上で御蔵版本『大日本史』（但し今摺り立て中に付後日届け）と、肴代、白銀などをお礼として持参した。

『再来記行』では「御同朋使ニテ毛利勢州ヘ日本吏（ママ）、長溝始付添ノ族ヘ白銀被下置、長溝屋形ヘ御禮ニ来ル」（再 p.641）とある。

そして翌十日、『再来記行』本文の最後の記述、

十日

毛利家ヘ多年世話ニ預ケル禮ニ出ツ、供廻・馬・槍・箱・両若黨・・

（再 p.641）

伊太夫は十日、毛利藩邸に礼にでかけたのである。そのときの行列は当然のことながら水戸藩上士の格式を示す行列である。騎乗の伊太夫、馬の口取り、挟箱持ち、槍持ち、供廻、そして両若党、少なくとも六名の供を従えている。この答礼で佐伯での日々と訣別した伊太夫は十五日江戸発足、十七日に水戸に帰り着いている。

伊太夫を待っていたのは水戸藩の尊皇攘夷（改革）派（天狗党）と保守門閥派（諸生党）の激しい内部抗争の渦であった。水戸に帰った次の年元治元（1864）年改革派に属した伊太夫は門閥派との争い（天狗党の乱）[4]に敗れ、京都に潜伏。明治元（1868）年戊辰戦争が始まると、諸生党追討の勅諚を奉じて、水戸から脱走した諸生党の市川三左衛門等を追って北越の戦闘に参加する。十月、市川等諸生党藩士が水戸城に進入し、城方の指揮を執っていた伊太夫勢と戦闘になる。その様子を外祖父青山延寿の話として山川菊栄は、

一〇月一日と二日の全日、城と弘道館に対峙した両軍は

たびたび出て激戦を交わした。城方の総大将鮎沢伊太夫は、本来父高橋旦室、兄多一郎と同じで短気で激しい性格だったが、この時も非常に激して、皆で総大将があれでは危ないといって見ているまに、陣頭に立って鉄砲でやられた、という。・・　『覚書 幕末の水戸藩』[5]（pp.372－373）

と記録している。佐伯から帰って五年、四十五才の生涯であった。

三、伊太夫ゆかりの『大日本史』

先に述べた、伊太夫が世話になった礼として水戸藩から贈られた『大日本史』について考えてみたい。

伊太夫が江戸の礫邸（小石川水戸藩邸）に帰った四日後、水戸藩からご同朋山方南無阿弥が使者として佐伯藩邸に赴いている。当日の「御用日記」には挨拶の口上に引き続いて「・・尤御書物之儀者當時御摺立中ニ付、追而御出来次第御差廻相成候・・」、とある。

その「大日本史」が出来上がったので届ける、という知らせがあったのは同年五月一日のことであった。

五月朔日

一御留守居宮本又右衛門申聞候、水戸様ゟ兼而被進ニ相成候大日本史此節御摺立御出来ニ付被差廻候段、御同朋衆ゟ申越候旨出之候ニ付、則御書物奉行共江相渡置候、追而御便當御地江差下可申候、

佐伯藩「文久三年御用日記」（史料№559 p.212）

この水戸藩から贈られた『大日本史』は今はどうなっているだろうか。このことを考える時に

①佐伯藩の蔵本中に『大日本史』があったのか。

②その『大日本史』は現存しているのか。

③もし現存していれば、それは伊太夫ゆかりの『大日本史』であるのか。

を確かめておく必要がある。

①佐伯藩の蔵本中に『大日本史』があったのか

増村隆也氏が『大分縣地方史第6号』（昭和三十一年二月刊）で「佐伯文庫の行方」と題して「御蔵書目録」を紹介している。そのいきさつをこう書いている。

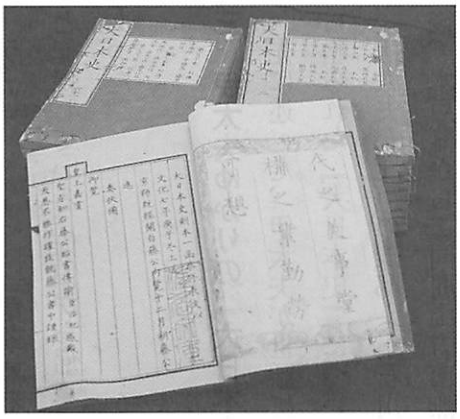
私は毛利高標公の百五十年祭を昭和二十五年八月十五日、歴代佐伯藩主の菩提寺養賢寺に於て、佐伯史談会主催、佐伯市教育委員会後援と云う形で大々的に法要を営み、又多彩な行事を行った。その直前の事である。幸に高標公の著書雅衍（ガエン）と毛利家蔵書目録を借覧する事が出来た。然し熱望した他の書

籍は遂に借りる事は出来なかった。

昭和二十五年に借覧し、書き写した目録である。その中の「書籍箱　桐製」の項に「東海道名所絵図」「資治通鑑綱目全書」などに交じって「大日本史 前巻 函入 五十本、全後巻 函入 五十本」、とある。

確かに佐伯藩は『大日本史』を所蔵していたのである。

②その『大日本史』は現存しているのか



現存すれば所蔵していると思われる佐伯市立歴史資料館に問い合わせた所、『大日本史』は所蔵している、とのことであった。現物を見せて貰った。

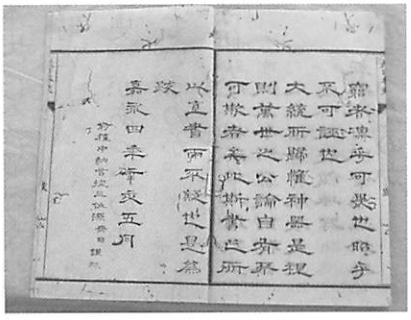
上に掲げたのが、歴史資料館が所蔵する『大日本史』の一部である。増村氏が紹介した、目録にある前巻・後巻が入っていたとされる「函」は現在その所在が確認できてないようであるが、百冊は同一の装丁で、一部虫損などはあるがほぼ完全な形で保管されている。

【『大日本史』開いているのは一巻巻頭[6]】

③伊太夫ゆかりの『大日本史』であるのか

所蔵されている「大日本史」を見ると、第一巻にはその巻首に光格天皇の勅諭[7]を掲げる。巻頭には文化七年、勅諭を下された経緯、そして献上の際の上表文を載せ、続いて正徳五年本紀七十三巻列伝百七十巻が完成した時の三代綱條の敍文を載せている。これらは「大日本史」にかかわる重要な経緯を載せたものであり刊行年をあらわすものではない。

刊行年の手がかりは、最終百巻、巻末に載せられた九代水戸藩主斉昭の跋文である。跋文の日付けは嘉永四年五月。所蔵の「大日本史」百巻はこの嘉永四年に上木した版木により摺られたものと考えられる。



【斉昭跋文】

また第一巻、第五十一巻には「佐伯文庫」の印章が捺されている。八代藩主高標蒐集の「佐伯文庫」に捺されている蔵書印に酷似する印章であるが国立国会図書館「蔵書印の世界」に見るものと比較する

と細部では異なるような印象を受ける。

いずれにせよ、刊行年から考えても高標蒐集の「佐伯文庫」でなく、御書物奉行管轄の御書物倉蔵書である、というほどの意味での「佐伯文庫」の印章であろうと思われる。第一巻、第五十一巻に押印されていることから推察すると、前巻・後巻、二つの函それぞれの最初の巻に捺されたものと考えられる。

【大日本史蔵書印】

【国会図書館蔵書印】(8)

佐伯市所蔵の『大日本史』は嘉永四年以降の刊行と考えられること。また水戸藩よりに贈られた『大日本史』は先にあげた「御用日記」で示したように、水戸藩の使者が訪れた文久二年二月五日の時点では「・・御書物(大日本史)之儀者當時御摺立中ニ付、追而御出来次第御差廻相成候段・・・」とあり、まだ印刷中であったことがわかる。従って文久二年頃に摺ったとすれば、直近に完成していた嘉永四年版であったと考えられる。

実際に摺り上がって水戸藩より届けられた五月一日の御用日記には「・・水戸様ゟ兼而被進ニ相成候大日本史此節御摺立御出来ニ付被差廻候段、御同朋衆ゟ申越候旨出之候ニ付、則御書物奉行江相渡置候・・」とある。即ちこの時贈られた『大日本史』は御書物奉行に渡され、「佐伯文庫」の蔵書印を捺され御書物倉に収蔵されたものと考えるのが自然ではあるまいか。

よって嘉永四年以降の版であり、「佐伯文庫」印が捺されたこの『大日本史』こそ、鮎沢伊太夫が世話になった礼として水戸藩より贈られたものと考えてよいのではなかろうか。

おわりに

『再来記行』は伊太夫赦免の日から書き起こされた日記である。御預人が書いた貴重な資料である。護送する側の『御用日記』と、護送される側の『再来記行』。両方の視点から見ることができる、その時は単にそう考えていた。

しかし、一読してみて、伊太夫の日記は単に両方の資料を比較検討するだけでは惜しい多くのことが読み取れる

資料であることがわかった。

何よりも心に残ったのは、佐伯の人々との温かい交わりである。

十二月十六日早朝、守衛士須田が伊太夫の枕元に来てそっと知らせた「今日役人共より命を伝える事あらん、定めて賀すべき事ならん、早起きすべし。」から始まり、二十四日、角石番所での「維（伊太夫）、多年守衛士と交わること、兄弟の如し、涙流れ、ことばなし。」という別れまでの九日間の様子が詳細に書き留められている。赦免された喜び、涙もある。さらに、禁錮から解放され、監視された者と、今まで監視したる側が別れを惜しむという、状況としてはあまり考えられぬ、記録としても希有な資料である。

そこに記された、隔てなく人と接し、心を開いて受け入れる麗しい佐伯の気風は、私自身が感じてきたことと重なった。私事にわたるが、私も学校を卒業するまでは佐伯の地を訪れたこともなかった。全く何も、誰も知らずに外から来たからこそ感じることもある。『再来記行』のあの別れの様子を読んで、佐伯の温かい心は、脈々と受け継がれ、育まれたものであったことを思い知った。

伊太夫は水戸で生まれ、江戸の牢から佐伯に護送されて来た。幽閉四年の後、その御預人が、麗しい別れの様子を書き残した。赦免の日の須田の言葉、細々した御祝の品々、それを丁寧に記録したのも、一筆を請うてやまぬ多くの人々も、別れの宴の様子も、そして涙の別れも、書き残したい思いがあったからこそ書いたのである。いわば伊太夫が佐伯の人々に残したメッセージともいえる。今から百五十六年前、こんな別れがこの佐伯の地であったことを多くの人に知ってもらいたい、そういう思いでこれを書き継いできた。

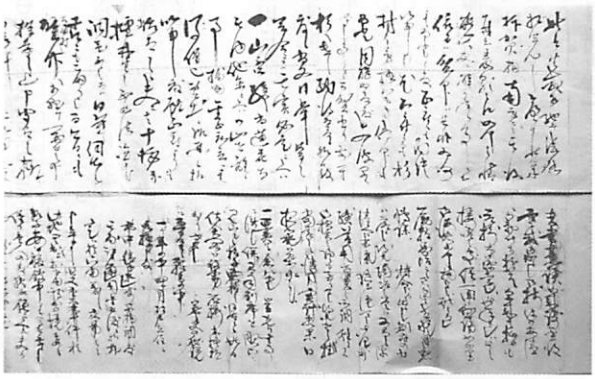
伊太夫と佐伯の人々がこのように心を開いた背景には深く通ずる共通の価値観があったのではないか。このことについては（三）で触れた（史談№232/p.17）。歌を大切にし、折にふれて歌を詠む。歌で心を通わす。そのような基盤がさらにふれあいを深めたのではあるまいか。

伊太夫が歌を能くすることは前に述べた。伊太夫は佐伯側のこんなことも書き残している。元旦に泊まった宿の主人が小倉藩で有名な歌人の短冊を贈ってくれた。「僕カ歌ヲ好ムヨシ、従卒魯一申ケレハ」（再p.602）主人悦んで贈ったのである。魯一は四日市でも伝手を頼って佐々木重蔵[9]の短冊を求め伊太夫に贈っている（再p.630）。このよ

うにする魯一を好もしく思っていたのであろう。同様に、従卒穀治の雪を頂いた富士山を見ての即詠もほほえましく、書き残したのであろう。贈られた多くの歌も「送別ノ詩歌追々到来、一々記ニ不暇」と書き残している。

佐伯の人々の生活の中に和歌があったことを示す、月を愛でる扁額もあった。[10] 詩歌が尊ばれ親しいものであった当時の佐伯の様子が温かい佐伯の心とあいまって歌を愛する伊太夫の心と響き合ったのであろう。

歌を愛し、和やかに人と交わっている印象のある佐伯の伊太夫であるが、その肖像も調べた限りでは見当たらない。[11] 天狗党の乱に参加した際、幕府軍が出した人相手配書中には「一眼中尖とき方一眉の間常に顰み居候」[12]、眼光鋭く眉をしかめている、とあり、水戸に帰って内紛に身を投じ、心休まるときはなかった様子が偲ばれる。



【伊太夫書簡二通（部分）[13]】
東京都立中央図書館所蔵

それだけにこの佐伯で赦免された後の九日間は心安らぐ貴重な時間であったであろう。

最後に是非触れておきたいのは伊太夫が佐伯を発つにあたって多くの人から請われて書いた短冊などの行方である。「請人多、数十枚ニ及ブ」とあるから、かなり多くの書を残したと思われる。いまそれらはどうなっているのであろうか。これをきっかけに一枚でも見つかってほしいと願っている。伊太夫の手紙二通を掲げておくので参考にして頂きたい。

最後に伊太夫が佐伯を発つ際詠んだ歌を掲げおわりとします。

長々おつきあい頂きありがとうございました。

別れては馴れしさへきの
　　里人を　さきくあれとて
　　祈るはかりそ

註

（1）横浜市統計ポータルサイト　「横浜市 人口のあゆみ 2010」
http://www.city.yokohama.lg.jp/ex/stat/jinko/ayumi/index-j.html
より

（2）文久の改革　一橋慶喜の将軍後見など幕府人事、参勤交代の緩和などを決めた。薩摩藩兵を率いた島津久光が随行し、勅使大原重徳から示された勅書の意向にしたがわざるを得ず改革は実施されることとなった。

（3）堀口友之進・石川清之允　『御用日記』では、「堀口友之丞・石川徳之進」となっているが『再来記行』に拠った。

（4）天狗党の乱　元治元（1864）年、筑波山で挙兵した水戸藩内外の尊王攘夷派（天狗党）が起こした争乱。伊太夫は途中から離脱し京都に向かっている。

（5）山川菊枝『覚書 幕末の水戸藩』岩波文庫 1991 著者山川菊枝は婦人問題研究家、夫は山川均、母は水戸藩士儒学者である青山延寿の娘。

（6）『大日本史』【佐伯市立歴史資料館所蔵】

（7）光格天皇勅諭「専據國史博考群書為一大部之書昭代之美事堂構之業勤勞可想（専ら国史に拠、博く群書を考へ、一大部の書を為す。昭代の美事、堂構の業、勤労想ふべし」（広く史料にあたり大部の大日本史を完成させた。美事である。代々続けてきたその作業は大変な苦労であったろう）、というような意味らしい。写真は「代之美事・・」からの後半部

（8）国立国会図書館ウェブサイト「蔵書印の世界」より」

（9）佐々木重蔵　佐々木弘綱、通称重蔵。幕末・明治期の国文学者、歌人。長男は歌人、国文学者の佐々木信綱。

（10）『佐伯史談№232』p.23 註（9）

（11）最後に掲げた伊太夫肖像写真は、原稿提出後、伊太夫の子孫である千葉県の鮎澤武夫さんにご送付頂いたもの。佐伯から帰って後の撮影であろう。掉尾を飾る貴重な写真、ありがとうございました。

（12）人相手配書　『史籍雑纂第四』【五　水戸藩黨爭始末】p.576　国書刊行會編　1912

（13）伊太夫書簡二通　上神木宛・下松下宛【東京都立中央図書館特別文庫室所蔵】

《鮎沢伊太夫肖像》

【鮎澤家所蔵】